

心理臨床における「聴くこと」について

山崎理央

福山大学人間文化学部心理学科

キーワード：傾聴、カウンセリング、心理療法

内海はカスミを見上げた。カスミが内海の視線を捉えて頷いた。

「自分といるとほっとするんでしょう」

「ええ」

「それは、自分が死んでいく人間だからでしょう」

「そうよ」

カスミはたとえようもなく優しい声で答える。内海の横たわった布団の傍らにぺたんと座り、子供のような質問を發した。

「ねえ、もうじき死ぬのってどんな気持ちなの？」

たちまちしんとして、息を詰めて返事を待っているカスミの規則正しい呼吸が微かに聞こえた。

「そんなこと、今言うんですか」内海は思わず笑った。

桐野夏生『柔らかな頬』（桐野，1999）

はじめに

筆者は現在、ふだんは大学に勤務しながら、当相談室のケースを担当し、また週一日は精神科のクリニックに来られる患者の方々の心理療法を担当している。以前には子ども関係の施設や教育センター併設の相談室などで、不登校や情緒障害の子どもや保護者の心理臨床にも関わっていた。心理療法を少しソフトな言葉で表現すれば「カウンセリング」、それをひとことで言えば要するにお話を聴く、ということのをこれまでやってきている。

したがって「あなたのやっていることは聴くだけか」と言われれば、もちろんそれには語弊があるものの、確かに聴くことが中心であることには間違いない。聴くことに始まり聴くことに終わると言ってもよいかもしれない。ここでは心理臨床におけるその「聴く」ということについて、去る2006年2月に開催された当相談室のリーク講演で話したことを整理し、述べてみたいと思う。

日常とカウンセリングでの人間関係

カウンセリングというものをもう一度なかば荒っぽく説明するなら、それは話を聴くことによって、その人の悩みを和らげたり、その人が問題の解決に向かうことの手伝いをする行為といえる。しかしそれだけのことだとすれば、聴くことというのは何もカウンセラーの専売特許ではなく、多くの人が日常の人間関係のなかでやっていることである。それに「相手の話を聴くことは大切だ」ということは、最近では世間一般でも強調されている。じっくりと相手の話を聴くことによって、両者の関係がより豊かになりうるし、事態をより発展的な方向に導きうるということ。そういったことは、対人的な仕事や援助的な人間関係に携わる人にとっては特に、聴くことはとにかく善いことだということとして、何となく共有されているのではないかと思われる。

やや昔には「カウンセリングマインド」という言葉が流行したらしく、援助的な人間関係においてはカウンセリングマインドが大事だ、親子関係、教師と生徒、上司と部下、どんな人間関係でもカウンセリングマインドで

接するべきだ、と強調された時期があつたらしい。ただ、これは一步間違えると日常生活においても「皆がカウンセラーになれ」などということになるわけであり、逆にそれぞれの人間関係の持っている独自の意味や役割というものが見失われかねないという点で、筆者には「それもどうなのだろうか」と疑問に感じられる。

「カウンセリングマインド」というときに、ニュアンスとしてはおそらく相手を否定しないとか暖かく接することに特化したコミュニケーションということを含んでいると思われるが、たとえば筆者も面接室外で教員として学生と接するときに、そのような形態の接し方ばかりになると不都合もさまざまに生じてくる。試験の出来がいくら悪かろうが授業をさぼろうが百点満点を与えろとか、「そうだよ、授業よりアルバイトのほうが大事だよ、うんうん」とやっていたら大変であり、そこには評価や指示や忠告や雑談や冗談や皮肉も行き交うのが実際であろう（そもそも、カウンセリング事態について受容的態度や無条件の肯定などと表現されているものを、上記のような何でも否定せず容認するような姿勢だと考えるのも、実はありがちな誤解なのである）。

つまり日常の人間関係にはそれぞれの利害や思惑などが絡んでくるものであり、そういう意味ではカウンセリングというものは人工的な人間関係であり、不自然な関係であると言わざるをえない。そのなかで醸成される非日常的な時間と空間のなかで行なわれる仕事がカウンセリングなのであり、「ただ聴いているだけ」と言うのには多分に語弊があるということになる。

さらに、ある人が適応的に生きていくためには、いろいろな人たちとの関係が影響しており、またいろいろな人たちの役割分担がある。したがって一生懸命に暖かく受け入れてくれる人も大事だし、一方では規則や常識を厳しく指導する人も必要である。皆がそればかりやっても苦しいが、逆に皆がいわゆるカウンセラーになってその人に接していたらどうにもならない。それぞれの人間関係の独自性というのは、大事にしたほうがいいのではないかと思われる。

聴くことの受動性と能動性

以上のことは踏まえつつも、聴くということの重要性は、やはり強調されてよい。心理的援助の基本は聴くということであり、クライアントとの出会いは聴くことから始まる。

さて、「聴く」とことというのは単純に考えると受け身の行為である。耳をふさがない限り、聴く意思の有無にかかわらず音声は勝手に聞こえてくる。会話にしても、話してくれる相手が存在しないと始まらないのだから、聴くという行為の成立が相手の存在の有無に委ねられているという点で、やはり受け身の行為ということになる。

一方、聴くことの対称にある「話す」ことは、それとは逆に積極的で能動的な行為である。話すためには言葉を選び、言葉を発し、聴き手に働きかける必要がある。うまく話せるだろうか、伝わるだろうかというふうには、話すという行為には聴くことに比べて労力と困難をとめないがちな感じもする。

ところがカウンセリングの考え方では、聴くことというのが実は能動的な行為なのだと捉えなおされることになるのである。つまり、聴くことはひとつの積極的な働きかけだということであり、そのことを表現した「傾聴」という言葉がよく用いられているのは周知のとおりである。音声をただ漫然と耳に入れるのではなく、気持ちを集中して相手の心に添っていくことが援助につながる。そういった姿勢を言い表すには、「聞く」よりも「聴く」という表記のほうがどちらかというとしっくりする。

ところでこの類の話は、些細で取るに足りない、たいして意味のないことと思える向きもあるかもしれない。ただし言うておくと、クライアントの語るという行為のひとつひとつに意味を汲み取ろうとするカウンセリングの姿勢の一側面が、ここにも表れていると言えるのではないか。また、同じ「きく」ことを表すのに「聞く」「聴く」「訊く」「利く」「効く」と幾通りもの表記が可能であることも、個人的には非常に興味深く思える。つまり、カウンセリングにおける「きく」行為が、つねに「聞く」ではなく「聴く」姿勢のみで体现されているかという点と必ずしもそうではないと思われるし、クライアントへの問いかけとして「訊く」ことももちろん不可欠である

し、カウンセラーは何らかの「利く」ことや「効く」ことを期待してクライアントにかかわっているからである。

ある現象はそもそも多様で幅広いものであるが、ひとつの表記を与えることでその混沌としたものを扱うことが可能になる反面、その多様さがどこか限定され固定されたものになりがちである。上のような言い換えや書き換え可能な言葉というものの特徴が示してくれるのは、それらに改めて目を向け、固定的でなく動的にとらえる手がかりとでも言えるものではないだろうか。もう少し言うと、聴くということは受動的な行為ではないというのではなく、やはり受動的な行為でもある、つまり受動的でもあり能動的でもあるということである。さらにもうひとつ言っておくと、能動的ならよくて受動的ならよくないというのでもない。カウンセラーがみずからの関わりが受動的であることを受け入れられず、あるいは否認しようとして、能動的（に思える）働きかけに安易に走ってしまうことがもたらす悲劇は、本人がよかれと思ってやっているだけに、なかなかやっかいなものである。

聴くことにおけるこの受動性・能動性の問題は、話し手と聴き手の役割に関するものでもあるが、これはカウンセリングが人工的な関係だと先に述べたこととも関連する。実は日常の人間関係においては、カウンセリング場面のように受動的に聴きつづけることはなかなか困難であるし、さらには能動的に聴きつづけることも、カウンセリング場面のようにはなかなかいかない。やはりどちらも不自然なことなのである。

この「不自然さ」を味わうことも含めたものとして、カウンセリングの初歩的な応答訓練でよくあるのが「相手の話に、あいづちやうなずきだけでひたすら応じる」というものである。実際にやってみるとわかるが、すぐにこちらも何か言いたい気持ちが出てきて落ち着かなくなる。聴く役割を受動的にとりつづけようとするはずが、つい「能動的に」こちらが話す役割に転じたい衝動にかられてしまう。では、「自然な」日常の人間関係ではどうということになりがちだろうか。日常ではそこで相手の話を遮って言いたいことを言ったり、話を誘導したり、話題を変えたり、先に結論ありきであったりすることは、それこそ日常的に「アリ」である。また、相手の悩みを聴きつづけていると、こちらも苦しくなってくる。相手の背負った荷物がこちらの肩に乗ってきて、片足を踏み入れて責任の一端を負わされるような不安が出てくる。聴き手がそこでつい発する「気にすることないよ」「何とかなるよ」といった言葉は、相手を励ましているようでいて、実はそこで話を終わりにしたいという、自分のための発言なのかもしれない。もちろん言われた相手がそれで腑に落ちて安心できる場合もあるだろう。一方で、たとえば親しい人を亡くした遺族が「亡くなっても心の中で生きています」「これから必ずいいことがありますよ」「お子さんは一生分を充実して、短い間に生きたのですよ」といった周囲からの励ましを、しばしば傷ついた言葉として体験している事実は知っておいたほうがよい（小西，1996）。クライアントの問題も、面接室のなかで話がつくわけではないのである。ただ、日常の雑事に話を戻すと、ひとつひとつの問題にはどこかで線を引いて、話に区切りをつけることによって、私たちは日々の生活を処理していけているのであり、それはむしろ適応的なあり方でもある。

日常において相手の話を能動的に聴きつづけるのがむずかしいのは、こちらも体験的に誰もが理解していることであろう。話し手に対する興味関心を持続的に抱きつづけていなければ、すぐに話の筋や背後にある話し手の思いがつかめなくなりがちである。意味を受け取らず、音声だけが耳に入ってくる状態。上記の「話に区切りをつける」例とも言えるが、相手がひとつのことにとらわれて繰り返し話題にすると、聴き手の側には「またその話か」という思いが生じてきて、その話題に対して関心を向けつづけるモチベーションが維持しにくくなる（なお、カウンセリングではそういったモチベーションの低下が自分のなかに生じていることに目を伏せて、あるいは聴きたくないという気持ちを否認したままでもとにかく聴きつづけるべきだ、ということではない。クライアントやその話題に対して抱くネガティブな感情、そういったものに目を向けることを通してこそ、クライアント理解に近づく端緒がひらけることが多いのである。カウンセラーという「善人」がクライアントにネガティブな感情を抱いてはいけないと否定するのは、そのことにいわば「耳をふさぐ」、つまり聴かないということの意味する）。

話すことと聴くこと

このように、聴くという行為は能動的にも受動的にもなかなかむずかしいものであることを述べたが、それでは話し手にとっては、聴くという行為がどのようなインパクトのある体験をもたらすのだろうか。これについては、表記の書き換えというある種の言葉遊びを、聴くことに対応する話すことについて再度取り上げてみたい。

「はなす」という同じ音にも、すでに内海（2005）が述べているように「話す」「放す」「離す」という複数の表記を当てることができる。まず、「話す」ことは「放す」ことに通じるという。ここでの重要な指摘はこうである。私たちが何かを言葉にするということは、あたかも話し手のなかに彼自身の体験が存在し、それについての明確な概念が話し手の頭のなかにすでにあって、それが言葉として話される、という図式を私たちは前提としているように思われる。しかし私たちは、自分が何を体験しているのか、あるいは何を考えているのかということが、話すことによってはじめてわかるのではないかということである。私たちはいったん外に向けて未知のものを言葉として投げかける。それから他者あるいは社会というものから意味を受け取る。「話す」が「放す」に通じることによって、このような回路が作動しているのだと。さらには、「話す」ことは「離す」ことでもあるとして、同じく内海は次のように述べている。私たちは話すことによって自分自身の体験から距離がとれるようになる。体験が一義的に決定ずみのこととして押しつけられるのではなく、それを解釈する自由が与えられる。それによって私たちは体験に対して、その体験の主体となるのだと――。

実際、悩みというものは言葉で説明しにくいところがある。何とも説明をつけるすべが思いつかないのだが、確かに苦しい。「これこれこういうことで悩んでいます」と筋道立ててははっきり言える場合は、ほとんど解決方法が見えてきたような状態に至っていたり、選択肢は把握できているが踏ん切りがつかない段階であったり、ということが往々にしてある。うまく言葉に表せないし自覚できないから、心理的に抱えられずに身体的に表現していたり行動で表したりするという場合もあるだろう。

そこでは、悩みそのものと自分自身がいわば一心同体になっており、距離がとれない状態になっている。それでも相手に話すとなると、言葉として形にしなければ何も伝わらない。これは哲学者の驚田（2006）による考えであるが、自分の悩みについて語るということは、苦しみそのものである自分がいったんそれを相対化する作業に取りかかるということであり、語るなかで自分の悩みと自分自身とのあいだに距離を生み出すいとなみなのである。聴くということには、相手にそういった作用をもたらさうる行為だと考えることができる。

このように、聴くということには、そのプロセスそのものに意味がある。もちろん聴くことによって聴き手から何かの解答が与えられるかもしれない。それはそれで意味はあるが、しかしそれは結果であって、話し手の外から与えられるものである。聴くことによって話し手が自分自身で変化していく、聴き手がそれに付き添っていく行為という側面をここでは強調したいと思う。

心理臨床における聴き方の姿勢としては、相手が自由に話すのを促すということがひとつある。聴き方のコツということでよく言われるように（コツというのは小手先のテクニックという意味ではなく、こちらの聴く姿勢を有効に生かすためのコツということ）、うなずきやあいづちを打ちながら聴く、相手の発した言葉をくりかえしたり、ときに要約したりするなどして「あなたの話を関心を持ってこのように理解しながら聴いていますよ」というメッセージをフィードバックしながら聴くということも重視される。

冒頭に述べた「皆がカウンセラーになる」とことは別の意味で、こういった姿勢が日常生活においても、よいものとされ大切にされることは素晴らしいことである。現代社会における効率重視、即効性重視の風潮にあって、話したいことを自由にありのままにじっくり聴いてもらえる体験というものが、えてして得がたいものになってきていることは否めない。そのなかにあって一見ムダな、即物的な変化を必ずしも保証しない、ある程度の長い時間のかかりうる関わりというものの存在意義も、やはり忘れられてはならないであろう。

聴きすぎることの強さと怖さ

先に、日常生活での人間関係において、傾聴つまり能動的に聴くということがなかなかむずかしいこと、また一方でそれは自然なことでもあるということ述べた。逆に人工的で不自然な関係であるカウンセリングの場では、そのことにともなう特有のむずかしさが出てくるのであり、心理臨床においてはそのことに自覚的である必要がある。そのむずかしさについて触れておきたい。

心理臨床の現場において傾聴の姿勢が尊重されるのは、言うまでもなく基本的なことである。ただ、そこでは人工的で不自然な関係が設定されているという意味で、傾聴の姿勢が日常の関係より取りやすくなっていると言うこともできる。つまり、カウンセリングでは（それに限らず他の形態の心理臨床でも）会う場所、会う時間、会う頻度などの設定がある。カウンセラーは相手の話を聴くのであって自分の身の上を話すのは控えるとか、安易に励ましや指示を与えないといった、（それぞれの理論的立場や学派によって異なるにしろ）カウンセラーの機能や役割というものがある。こうした設定や機能の助けを得ることによって、クライアントは守られながら自分のことについて開示する用意ができるし、カウンセラーもまた守られながら日常の関係とは異なる関わりをクライアントと築いていくことが可能となる。

ここで日常の人間関係と同じように、傾聴や受容と共感によって相手がいい気持ちになり、互いの関係に豊かで前向きなものが一方向的にもたらされ、楽しい展開が待っていると素朴に考えているなら、それは気をつけたほうがいだろう。聴くことが「ただ聴くことではない」ということには、聴くことが手放しで善いことであるとか、つねに奨励されるべき行為であるとか、そういうことではないという意味も含まれているのである。

このような傾聴の姿勢による関わりを一定の時間や頻度で提供しつづけるという設定は、クライアントにとっては強力な力を及ぼすものである。「こんなにわかってきている」「こんなに認めてくれている」「こんなにしてくれている」体験。これは非日常的で人工的な関係という点で、日常では得がたいものであるし、それによってクライアントが癒され、元気を取り戻し、自分の力で生産的な前向きな生活を築いていくきっかけをもたらすかもしれない。おそらくそのことを自然治癒力の賦活というふう言い表したりもする。

ところがこうした設定は一方で、クライアントの依存を引き起こし、非現実的で万能的な期待を助長させる可能性がある。そのようなカウンセリング的かかわりが必要性的認識と自覚のもとに行なわれるのであれば、クライアントに不必要な退行をいたずらに促す危険性とも隣り合わせなのである。また、共感はいくまで「あたかも」自分のことのように感じることであり、現実には自分と同じではない。厳密に言えば「わかってきている」「わかってあげている」というのは幻想であり、いつかどこかでズレが生じ（てい）るのは必然なのである。

クライアントとカウンセラーとの関係の推移について言い表すのに「ハネムーン」という言葉があるが、そのズレが一方あるいは双方に自覚され表面化したときにこそ、そのクライアントの抱えるものによりやく触れられるところまで来たのかもしれない。しかし日常の人間関係でこのようなことが生じた場合、関係の維持だけが目的化した表面的な関係が不毛に続くか、「悪者さがし」の泥沼に向かうか、両者の関係がそこで切れてしまうかになりがちである。カウンセラーの側も一方では、「私だけがわかってあげている」「こんなにいいことをしてあげている」「こんなにクライアントも喜んでいいる」といった自己愛的な万能感の満足のためにクライアントを利用していることに目が向かないと、クライアントの病的な退行を前にして、自分の働きかけがもたらしていることは棚上げながらクライアントへの非難に転じる、という状況に至るかもしれない。

言うまでもなく、クライアントとして訪れる人は、日常でそのような関係の破綻をくりかえし体験することを余儀なくされている人たちである場合が少なくない。カウンセラーとの関係においても、同じような関係の推移が生じる可能性が高いのは当たり前のことである。そういったクライアントの語りを聴くということにともなって、聴き手自身もそのプロセスにおいてある程度の傷つきを体験したり共有したりすることは避けられない。し

かし聴き手はその傷つきを通してクライアントの抱える苦悩の理解に近づきつつ、その傷つきに持ちこたえる必要がある。それはハネムーンが終わって、クライアントが目のまえのカウンセラーに抱いていた理想化が実は幻想であることが露わになったときに、日常と同じような関係の破綻がそこで単純に繰り返されるのではないプロセスをクライアントが体験すること、つまりカウンセラーが日常での関係と同じようにクライアントから去っていかないことであろう。ちなみに、先ごろ亡くなった木下順二の戯曲『夕鶴』は、我が身を削って与ひょうを助けるつうの物語であるが、『鶴の恩返し』の民話をモチーフとしている（木下、1954）。この素材は、相手の期待に応えて自己犠牲的に献身する援助者像、また援助者自身が傷ついて去るというあり方が、日本で古くから理想化され共有されていることを物語っているのかもしれない（北山、2001）。

傾聴というのはそういう意味で、強力な行為であり、怖いものと言える。「聴かなければ傷つくこともない」「聴かないほうがよいこともある」とでも言えるようなこれらのことは、ものごとの二面性というか、一方の真実を示すものであろう。「聴く」ということを少し広くとらえると、心理テスト、とりわけ投影法の反応を見る行為もまた、言葉とは次元が違うにしろクライアント（被検査者）の声に傾聴するということである。描画法は場面依存性が高いという点で、クライアントの客観的な自我状態を測っているというより、対人状況への反応性を見ているという側面があるわけで、それは対話そのものである（青木、1986）。また、ロールシャッハ法で病的な反応がうかがえるのに制止もせず反応を促しつづけるのが問題であることも、先述したことと照らして考えることができる。

わからないということ

カウンセラーの仕事はよく聴くことだから、日常の人間関係にくらべて「ものわかりがよいこと」「すぐに理解してくれること」が期待される前提としてあるかもしれない。もちろんカウンセラーにとって大事ななのは、聴くということによって相手のことをよりよく知っていく、豊かに理解していくということだけでも、そのためには逆説的だが、「わからない」という思いを保ちながら聴くということが実は強調されてよいと考えられる。

「カウンセリング」という言葉は言ってみれば投影法の心理検査のようなものであり、その曖昧な用語という刺激に人々はそれぞれの抱えている印象や先入観や期待を投影する（弘中、2004）。それはたとえば「カウンセリング」は言語的なものであり「心理療法」は非言語も含むものであるとか、「カウンセリング」は表面的な感じがするが「心理療法」は深そうだとか、逆に「カウンセリング」は健康の人向けであり「心理療法」は病気の人が対象であるような気がするから自分は前者のほうが何となく受けやすいとか、そういったものであったりする。カウンセラーもさまざまなイメージを投影される対象であり、「相手の心が読める」「少し話を聴けば問題を言い当てられる」というイメージを抱いている人には、カウンセラーが「わからない」を保つというのは意外に思われるかもしれない（念のために断っておくが、これは「わかる」ことを否定したり放棄しろと言っているわけではもちろんない）。

先に共感についても述べたが、「わかった」というのは往々にして「わかったつもり」のことであり、相手を理解しようとするモチベーションはそこで止まってしまう。たとえば仮に頭のなかに病気や症状や概念の名前のリストがあり、話を聴きながら「ああ、この人は〇〇だな」と、リストから該当個所を検索して当てはめるとする。これはもうその時点で思考停止になり、その病気や症状や概念の名前に切り取られたものが固定され、「耳をふさぐ」ことに陥りかねない。そう考えると、カウンセリングの訓練というのは、いかにこの「わからない」という自分の思いに傾聴できるようになるかということでもある。

そこで聴き方の姿勢のいくつかとしては、もちろん相手の話の内容を論理的に理解する力を育てるのも大事だが、それだけではなく内容以外にも傾聴するのが大事なことと言える。ある意味で当然のことだが、たとえば話し方で言えば、早口でまくしたてたり、ゆったりした話し方から、話し手の焦っている様子やリラックスした状

態を推察するといったようなことである。あるいは、たとえば「あなたはどう思いますか」と尋ねるのに対し、「主人はこれこれと書いていました」とか「お母さんはこう書いていました」と、つねに他者を主語とするクライアントがいる。そこからクライアントとその他者との関係の近さや、クライアントの主体性がその他者に飲み込まれてしまっているのか、といった可能性を推し量る手がかりが得られたりする。

さらに、話の内容そのものだけを鵜呑みにせず傾聴するということでは、傾聴のプロセスのなかでカウンセラー自身の内面に生まれるさまざまな想念も、貴重な手がかりとなりうる（理論的立場やスタンスによって、これに対する扱いを前提とするかしないかは異なるが）。話を聴いていると、聴いているこちら側に、自然にいろんな思いが浮かんでくる。それはときに不快で嫌悪をもよおすものであったりする。

非常に深刻な内容を話しているのに、聴いているこちらには、どうもその深刻さや現実感が伝わってこないということがある。または妙に楽しくなるとかイライラしてくるといったように、内容にそぐわない気持ちが聴いてるほうに湧いてくる。たとえば相手が「大丈夫です」「安心しました」と言っているのに目が浮いている、そういう状況をまえにして、聴いているこちらは何だか落ち着かなくなったりする。その内容と気持ちのズレ、そぐわなさといったものが何から来ているのかということは、その場そのときには「わからない」場合が多い。しかしそれもやはり相手の切実な何かを知る手がかりである可能性を考えると、カウンセラーのなかに自然に湧いてくるそういった気持ちを「こんなことを思っはいけない」「たいして意味はない」と否定してしまうのは非常に勿体ない。比喩的な言い方であるが、傾聴は耳だけでなく、視覚や嗅覚も含めた全身的な行為と言える。

おわりに

心理臨床ではこのようなことに留意しながら、「わからない」に留まりつつ、「わかる」に近づく努力、「わかる」と次に出てくる「わからない」、これを繰り返して行き来するということが、聴くということなのだろう。

日常の人間関係では「一を聞いて十を知る」ということが聡明で望ましいこととされているが、心理臨床において重要なのは、それをもじって「十を聴いて一を知る」とことという言い方もできるのではないかというふうに考えている。

引用文献

- 青木健次 (1986). バウムテスト 臨床描画研究, I, 68-86.
弘中正美 (2004). “浅い”と“深い”を行き交う こころの科学, 113, 51-54.
木下順二 (1954). 夕鶴・彦市ばなし(改訂版) 新潮文庫
桐野夏生 (1999). 柔らかな頬 講談社
北山 修 (2001). 幻滅論 みすず書房
小西聖子 (1996). 犯罪被害者の心の傷 白水社
内海 健 (2006). 精神科臨床とは何か—日々新たなる経験のために— 星和書店
鷲田清一 (2006). インタビュー「聴く」ことの力 言語, 35, 2, 20-27.

“Listening” in Psychotherapy

Rio Yamasaki

The act of listening is important in daily life, and an especially basic act for the psychotherapy. However, it is difficult to do it continuously and completely. The author thinks we should be conscious enough of that. The author also describes some points that should be considered about the act of listening.